

# 令和7年度全国学力・学習状況調査における

## 北九州市立 深町 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、6年生を対象として、令和7年4月17日（木）に、「教科（国語、算数、理科）に関する調査」、文部科学省が指定した日（4月18日から4月30日の間）に「児童質問調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

### 1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

### 2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査（国語、算数、理科）

#### 教科に関する調査（国語、算数、理科）

- ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ② 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

- (2) 児童質問調査

#### 児童質問調査

- 学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

### 3. 教科に関する調査結果の概要

#### (1) 全国・本市の学力調査（国語、算数、理科）の結果

本年度の結果	国語		算数		理科	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	8.9	64	8.6	54	9.1	53
全国	9.4	67	9.3	58	9.7	57

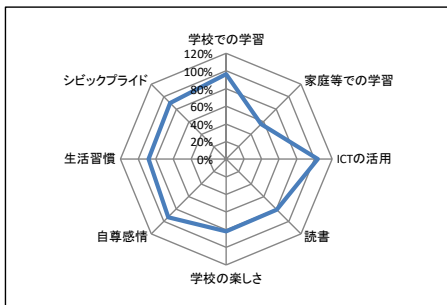
#### (2) 本校の学力調査結果の分析

国語	全体的な傾向や特徴など	全体的に全国平均正答率を下回っていた。ほとんどの領域においても全国平均を下回っており、課題がある。しかし「我が国の言語文化に関する事項」については全国平均正答率を上回っている。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気づく問題。時間的な順序や事柄などを考えながら、内容の大体をとらえる問題に関しては、無回答率が全校平均よりも下回っている。	
	努力が必要な問題	目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表したり工夫する問題。また、目的に応じて文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付ける問題について無回答率が全国平均より大きく上回っている。	

算数	全体的な傾向や特徴など	全体的に全国平均正答率を下回っていた。どの領域においても全国平均を下回っており、課題がある。しかし、「数と計算」領域の1項目に関しては全国平均正答率に近いレベルにあった。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	「示された資料から、必要な情報を選び、数量の関係を式に表し、計算する」問題「角の大きさについての理解する」問題、「基本図形に分解することのできる図形の面積の求め方を、式や言葉を用いて記述する」問題。	
	努力が必要な問題	「棒グラフから、項目間の関係を読み取る」問題、「簡単な二次元の表から、条件に合った項目を選ぶ」問題、「データの活用」の領域に関する問題について無回答率が全国平均より大きく上回っている。	

理科	全体的な傾向や特徴など	全体的に全国平均正答率を下回っていた。ほとんどの領域においても全国平均を下回っており、課題がある。しかし「地球」を柱とする領域の2項目については全国平均正答率を上回っていた。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	身の回りの金属について、電気を通すもの、磁石に引き付けられるものがあるなどの知識を問う問題、水の蒸発について、温度によって水の状態が変化するという知識を基に、概念的に理解している問題。無回答率はほとんどの領域において、本校は全国の無回答率よりも低くなっている。	
	努力が必要な問題	赤土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、結果を基に結論を導いた理由を表現する問題、顕微鏡を操作し、適切な像にするための技能が身につけているか問う問題、レタスの種子の発芽の条件について、差異点や共通点を基に、新たな問題を思いだし、説明できるかどうかを問う問題、発芽条件を問う問題に関しては、無回答率が全国平均より大きく上回っていた。	

### 4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問調査結果の概要



全国平均を100としたときの本校の割合

質問調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> <li>「先生はあなたのよいところを認めてくれているとおもいますか」「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいあるか」との問いに対して約80%の児童生徒が肯定的に回答している。</li> <li>主体的・対話的で深い学びや個別最適な学びの実現が、児童生徒の自己有用感等の向上につながることを踏まえて、今後も学校全体で授業改善を進め、児童が「わかった」「おもしろい」と実感できる授業にすることが必要である。</li> <li>ICTの活用において、「インターネットを使って情報を集めたり、文章を作成したり、プレゼンテーションを作成したりできる」との問いに対して約90%の児童生徒が肯定的に回答している。</li> <li>家庭学習の時間が少ない。学校で児童がICTをよく活用できていることを生かして家庭でも1人1台端末を利用した学習課題に取り組むなどにより、家庭学習の時間を増やす。</li> </ul>

### 5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

#### ① 教科に関する取組

- 「わかる・できる」喜びを実感しながら、基礎的・基本的な知識や技能を確実に身に付けるとともに、学習課題や活動を工夫し、「もっと考えてみたくなる」「もっと表現してみたくなる」意欲を育てる。また、ScTNを導入し児童の学びの状況を可視化し、学習の改善を図る。
- 課題のある事項を整理し、授業では、学習過程を工夫し、1時間の授業の中で基礎的・基本的な知識や技能の確実な定着を図るとともに、自分の学習状況に応じた学習課題に進んで取り組めるようにする。

#### ② 家庭生活習慣等に関する取組

- 宿題や家庭学習について
  - ①発達段階や個に応じた内容を再検討する。
  - ②「何をどう取り組めばよいか」自分自身の得意とつまづきを把握し、苦手克服にむけて取り組める力を育てる。
  - ③タブレットを活用したAIドリルでの学習調査・分析・改善を行う学習過程を繰り返し、広く学力を育てる。
- 身近な人や地域との関わりが実感できるよう、市民センターを中心とした連携を密にする。学校が地域と家庭をつなぐ活動や場を設定する。学校開放日に合わせて保護者や地域の方が交流できるような機会や活動の設定を行う。